香川県農業試験場研究報告　第 12 号(1961 年 12 月)　 1-7

暖地におけるイネ縞葉枯病の防除に関する研究

1.イネの栽培型と発病との関係について

上原等・佐藤芳久・川染正

暖地における稲の栽培型４型と,中生のキンマゼを各栽培型と同じ時期に栽培し,栽培型および同一品種の植付時期と縞葉枯病の発病被害との関係を調査したところ次のような結果を得た。

１．苗代における感染率は,４月下旬に植付けるものでは全く認められず,５月下旬から６月上旬に植付けられるものではときとして若干の感染を認めるが殆んど問題にならない。これに対して６月下旬に植付ける普通栽培では相当高率の感染が認められた。晩期栽培では苗代感染を認めなかった。

２．各栽培型の本田における発病被害は、5 月下旬に植える麦跡早期栽培や中生の中期栽培に最も激甚であり、ついで 4 月下旬に植える早植早期栽培や中生の早植栽培である。早生品種を 4 月下旬に植えたものは発病廻避の効果が顕著である。普通栽培では発病株率はかなり高率に達したが、苗代や本田初期の発病株は早く枯死するためか健全株の補償作用にカバーされ、また、後期の発病はめい虫の集団防除などによって抑えられ発病茎率が低率であったため、実害は少なかった。晩期栽培は発病被害ともにきわめて軽微であった。

３．発病時期をみると、7 月植えの晩期栽培を除いて、各栽培型とも発病頻度の最も高い時期は 6 月下旬から 7 月上旬であった。これは 6 月上中旬がヒメトビウンカの多発期であり、この時期にどの栽培型とも一様に感染頻度が最も高いことによるものと考えられる。